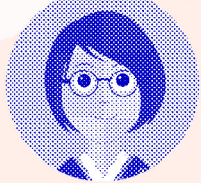


のまとはんなと

Vol.1

Interviewer



酒井咲帆

株式会社アルバス代表

のまは野間孝弘さん、はんなは山本ハンナさん。ふたりのカメラマンを紹介したく、このジャーナルを好き勝手に発行させてもらっています。聞き手は、酒井咲帆 (ALBUS)。私はふたりのカメラマンに惚れて、一緒に仕事したいと熱烈オファーし、その想いをふたりに受けとめてもらった経緯があります。長年、写真館を運営してきましたが、いい写真はカメラマンとの出会いからと考えています。だから思い出に残したい記念日を撮影したい場合は、写真館の雰囲気や、商品のデザインなんかよりも、本当は相性の合うカメラマンを探した方がいい。そして長く同じカメラマンとお付き合いできれば、それはその人と作る思い出に変わっていきます。お互いに人として成熟していく瞬間を共有できて、出来上がる写真はもちろん、その時間もいい記憶になっていく気がします。

NOMA



野間 孝弘

Takahiro Noma

Noma's photo



長崎県生まれで20歳から写真を撮り始め、写真会社を経て独立。関西を中心に活動後、2020年から福岡で活動を開始しました。シンプルで普遍的なものが好きです。流行りに流されず、浮かれず、目の前の人々、物事を素直に受け止めて良い写真を撮っていきたくと思っています。皆さんとお会いできる日を楽しみにしています。

ハマっていること

サウナにハマっています。最近初めてサウナ専用の施設に行ったのですが、あれは凄いです。初めは、ああサウナね流行ってるよね〜くらいの気持ちでしたが、もう凄いです。いつか違法になるんじゃないかってくらい精神に良い影響を与えます。合法なうちに沢山行くべきだと思い毎週通っています。サウナおすすめです。

HANNA



山本 ハンナ

Hanna Yamamoto

Hanna's photo



熊本生まれ福岡県春日市育ち。まともにカメラを握ったのは高校の写真部から。「写真屋さんのお姉さん」を経て、九州産業大学写真学科で写真を学び、卒業後は広告カメラマンの師匠の元でたくましく図太く育ちました。カメラを握った当初から、人の表情や人のいる風景を撮るのが大好きで、今もそれは変わっていません。無茶振りするのめされるのも大好き。ガイドブックに載っていないところを旅して楽しめるタイプの方と相性がばっちりだと思います〜!

ハマっていること

仮面ライダー、戦隊モノ、セーラームーン、ミュージカル (劇団四季、東宝 ...) ディズニー
恐竜、深夜ラジオ (オードリー、星野源、フワちゃん ...)

去年はインド映画 (RRR) にはまって6回見に行きインド神話やインドの歴史、文化、言語について学びを深める時期がありました。根がオタクなので様々なコンテンツに広く浅く〜常に何かに突っ込める準備万端で生きています。



カメラマンになった動機は？

のま：20才くらいのときに、カメラってすごいなって思ったことがあって。撮影した写真を振り返って見たときに、記憶になかった細部まで写っていることに気がつきました。母が実家の部屋で幼い僕を撮った写真があったんですが、僕自身よりも背景の面白さに目がいききました。たまたま写った時代を感じさせる電話やタンス、懐かしい気もするオモチャとか…そういう撮った本人が意識してなかったものまで丸ごと残してくれるのが面白く感じて、普段から写真を撮り始めるようになりました。

はんな：高校から写真部で、フィルムカメラを使って撮っていました。私自身は過ぎていく瞬間が貴重だなと思っていたんだけど、当時、周囲の友人たちはあまりそのことに気がついてなくて。それでも、何年後かに見たらきつという写真！と思うに違いないと確信しながら撮影を続けてたら、卒業するときにその確信が真実が変わってました（笑）。それ以降もなんでもないようなことをいっぱい撮ろうと思って撮り続けています。例えば私の目で見た社会を撮影し続けたら、いつか歴史や社会の教科書にも載るのかも！？と思うと、よりワクワクしたりして（笑）。

ふたりにとってカメラやカメラマンとは？

のま：新しい人に出会う機会を与えてくれたり、出会ったばかりの人を撮影することってカメラマンだからこそだと思います。カメラを持っていることでぐっと入り込める感覚もあったり。僕にとってカメラは、コミュニケーションを手助けしてくれるアイテムです。

はんな：カメラは私のパワーアップアイテム。カメラがなくてもコミュニケーションは得意だけど、あった方がより人生を楽しませてくれる。私は人が好きで、周囲の人たちの人生を撮影することでパワーをもらっていたりもする。誰かの成長を見守れるなんて、こんなしあわせなことはない！って思う。

のま：写真を評価されるとそれを越えなければとプレッシャーになったりすることもあります。期待を裏切ってはいけない、と思ってしまって（笑）。褒められることはとても嬉しいです。どんな形で写真を撮ることは続けていくと思います。

はんな：私の写真を見た人から何か反応があると嬉しい。家族撮影は反応がその場で見られるから面白いし、カメラマンとしての自己肯定感も高まる気がする。撮影する人、される人、相互に認めあっている行為な気がする。「はんなちゃん写真上手だね〜」ってもっと言ってほしい〜（笑）

「写真を撮ること」のどんな所が好き？

のま：色や形を見て写真を撮るのが好きです。良い空間を見つけると嬉しい気持ちになります。季節や時間で光も変わるので、毎回新鮮な気持ちで撮影に臨んでいます。こう撮って欲しいなど希望がなければ僕に委ねてもらえたら嬉しいです。

はんな：私は撮影指示書大好き！キタキタキタ〜って感じで。（笑）商業写真もやっているので指示書慣れしているかもですが、無くてもヒアリングするのも楽しいです。撮りたいものも、逆に撮りたくないものも聞いてしまう。要するに、相手をたくさん知りたい。相手の正解に近づいていく作業が楽しいのかもです。指示書（＝撮影のイメージ）をもらうときは、具体的な写真を見せられるより、「ブルーアスの○号の雰囲気〜とか、好きなミュージシャンを聞いたりする方が、私の発想ともコラボできてよりいい物が生まれる気がします。

のま：カメラを使い始めてから、ボケやブレの特性を活かした撮影があるということに気がつき、偶然性なんかも大事にしています。カメラやレンズはたくさんの種類があるけれど、たくさん持ち歩くと視点が定まらないので、なるべく選択肢を減らして、自分の眼になるように35mm/85mmの単焦点で撮影するようにしたら、眼や腕を鍛えられるようになった気がします。制限が出来たことで逆に自由に写真が撮れるようになったと思っています。

写真を撮りつづけることの意味

はんな：アシスタント時代に頼まれた撮影に、70-200mmのレンズが必要で購入したことがあって。高い買い物だったので、取り戻すためにも使い続けなきゃと思っていたら、だんだん月日が流れて、最近自分のスタジオも持ち始めて。続けなきゃいけない理由がどんどん増えてる。（笑）でも一番の理由は、小学校からの親友が結婚して、妊娠、出産、子どもの誕生日など、記念日を迎えるたびに、『私が撮る！』という家族のような気持ちでいて、その子が20才になるまでは撮影したい！と思うようになっています。その子たち以外にも、周りにいる子どもたちが大きくなるまでは撮影を続けたいという意欲が、私の土台になっています。

のま：（はんなさんの意見を聞いて）すごい！僕は、趣味としても続けていけたらいいなと思っています。最近「生死」について考えたりします。今はありがたいことに家族や友人に当たり前に会っていますが、それがなくなる日がいつかきます。そうなった時に昔撮った写真を見て、みんなで思い出話をしたり、ひとりで近況報告をしたり。写真があることでその人のことを思う時間が増えるのは良いことだと思います。仕事の撮影では一期一会の場合も多いのですが、撮った写真が僕の手を離れて、僕の知らない所で、その人や周りの人にとって大事なものになると嬉しいです。

はんな：私も友人の死を経験したときに、自分の写真が遺影に使われたことはとても大きかった。その人の人生の最期に自分が役に立てたということで少し気持ちが和らいだ記憶があります。でもその反対で、よく会う機会があったのに撮影してなくて、遺影がなかったということも経験しました。カメラマンという私がいたにも関わらず、と悔しい思いがあったので、今はあえて遺影撮影会を催したり、いつも（長生きを祈りながら）遺影を撮るような気持ちで撮影したりしています！（それくらい気合いを入れているという意味で）

あとがき

写真館は増えてきていますが、たぶんカメラマンとは一期一会になることが多く、実はそのことにカメラマンも寂しい思いをしているかもしれません。あの子どうしてるかな〜、大きくなったかななんて、近所のおじさん、おばさんのように。このジャーナルがカメラマン側の思いを知ってもらうきっかけになるといいなと思っています。ふたりに会いたいなと思われた方はALBUSまでいつでもご連絡ください！（酒井）